風姿花伝第二、物学条々

神

凡そ、此物真似は鬼懸かりなり。何となく怒れる粧ひなれば、神体によりて、鬼懸かりに成らんも苦しかるまじ。但、はたと変はれる本意あり。神は舞ひ懸かりの風情によろし。鬼には更

〔口訳〕大体より言つて、神の物真似は、鬼の風情のものである。どことなく怒りを帯びたやうな相を持つて居るものであるから、その神体によつては、鬼の風情になつて差支ないと思ふ。但し、神物と鬼物とには全く異つた本質がある。それは、神は舞がかりの風情によいに反し、鬼は絶対に舞がかりになる便がないことである。神を真似る際には、如何にも神体にふさはしいやうに扮装して、気高くし、殊に出物でなくては、神といふ事はない筈だから、衣裳を飾り、衣文をつくろつて、荘厳に

に舞い懸かりの便り有るまじ。神をば如何にも、神体に宜しき様に出で立ちて、気だかく、殊更出物にならでは、神といふ事はあるまじければ、衣裳を重ねて、衣文を繕いて為べし。

演ずべきである。

〔評〕

能楽に於ける神には、柔和な相好であらはれるものがあるが、天神・大飛出などのやうな、すさまじい表情の面をかけてあらはれるものの方が多いやうである。これは、一面から見て、鎌倉南北朝時代に於ける「神」に対する人々の観念を、よく示して居るものと思ふ。本段にも、神は、「何となく怒れるよそほひなれば」とある。当時の人々は、神に対する畏怖の情が非常に強かつたものの如く感ぜられるのである。

神能は鬼がかりであるが、又一面に舞がかりになる所に、鬼能との相違があるといふ区別の立て方は、非常に興味がある。舞がかりになるといふ所に、神能の気高い幽玄さがあるのである。鬼は如何に上品にかまへても舞は舞へないのである。

底本：国立国会図書館デジタルコレクション『世阿弥十六部集評釈 上巻』能勢朝次 著